

女さかりの痛み

森瑤子

女ざかりの 痛み 森瑤子

主婦の友社

著者略歴 森 瑤子

1940年、静岡県生まれ。六歳の時よりヴァイオリンを習い、1962年、東京芸術大学器楽科卒業。アイバン・ブラッキン氏と結婚、三女の母。

1978年、「情事」で、すばる文学賞受賞。

主な著書に、「情事」「誘惑」「嫉妬」「熱い風」「ジゴロ」(いずれも集英社)、「別れの予感」(PHP研究所)、「風物語」(潮出版社)の他、最近作に「夜ごとの揺りかご・舟あるいは戦場」(講談社)がある。

女ざかりの痛み

昭和五十八年十月十四日 第一刷発行
昭和五十八年十一月二十五日 第二刷発行

定価 一〇〇〇円

著者 森 瑤子 (検印省略)

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社 主婦の友社

〒101 東京都千代田区神田駿河台一―六

電話 東京(〇三)二九四一―一一(大代表)

振替 東京二―一八〇番

印刷所 共同印刷株式会社

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店が本社へお申しください。

© Yoko Mori 1983 Printed in Japan

ISBN4-07-918519-7

女ざかりの痛み——目次

男と女のこと……………7

女は、もうずいぶん長いこと性の迷路の中で途方に暮れてきたが、いまや愛する男たちを巻きこんでしまったようだ。

私のジゴロたち……………19

私は男たちの中のジゴロの要素に少なからず惹かれる。男のたくましさよりも、冷淡さ、すげなさ、絶望した眼の色に。

別れの風景……………27

たった一人の女友だちを理不尽に激怒して見捨てたことにより、私自身もやがて見捨てられたような気持を味わった。

国際結婚……………39

男と女は絶望的に違うのだから、この両者の関係さえうまくいけば、国際結婚であろうとなかろうと、そう大差はない。

男の沽券……………47

男の沽券というからには女の沽券もあろう。目下のところ私の沽券は、夫の沽券にいつまで耐えぬくにかかっている。

贈りもの……………59

さんさん考え、歩き回って、結局、箱に詰めてもらうのはネクタイ。だが、また、ネクタイかと軽々しく言っただけ。

娘の年頃 71

目下の問題は、いつ避妊の件を持ちだそうかということ。当分、心配なさそうだが、娘のクラスメートを見ると安心できない。

二人の女 81

日本の女は、娘からいきなりお母さんにされてしまう。充実した女の性を楽しまないまま、母性の中に追いやられる。

女が仕事をするとき 91

何かが犠牲になるからこそ、生かされた時間や仕事の質が光るのであり、そうでなければ何の意味もありはしない。

大人の女ということ 101

三十五歳のとき、確かに私は飢えていた。あらゆる瞬間、あらゆる飢えに責めさいなまれていた。今、大人の女といわれて。

私のヒロインたち 113

彼女たちはスカーレット・オハラによく似ている。他者との関係を切り捨てながら自分の生を突き進んでいくという点で。

文学との出逢い 119

私の記憶に今でも鮮明にあるのは、いかにも寂しげで痛々しい感じのする、物を書く男の背中である。

父の夢

父が実現できず、私もまた芸大を出ながら坐折した夢を、愚かにも娘に託してみた。が、結果はむろん惨敗だった。

127

二つの老い

二人の老人は私たちを無力感に追いやる。一人は完璧なまでの甘えのなさで、もう一人は日本人特有の甘えの構造において。

131

妻たちの反抗

私は水仕事で太くなった指を隠しながら、「世の中、いまだに私の才能を発見してくれていないというわけよ」と呟いた。

143

私の軽井沢の家

三十五歳のあの夏、私は絶望していて無力だった。しかし何かをせずにはいられない、せっぱつまった思いがあった。

155

苦痛の味つけ

周囲の者たちまで傷つけ、犠牲を強いることの後ろめたさ。この反省がなければ、小説を書くことなんて面白いわけがない。

167

離婚のこと

離婚そのものよりも、そこに至るまでの長い陰惨な夫婦の下り坂こそ、子供たちの胸を痛める原因なのだと痛感する。

173

痛み

.....

183

悪の根が自分にあった、それが母に投影され、娘を犠牲者にした。私がアイモンだという認識は、私を絶望に追いつめる。

インナーへの第二章

.....

195

私は、孤立した女なのではないか。他人との関係を拒み、自立コンプレックスに自我がのっとられているのではないか。

PAIN

.....

207

ああ、なんときれいな朝、なんと満ち足りた目覚めだろう、私は今、幸せだ。そう言い聞かせた直後に、それは私を襲った。

十八年目の抱擁

.....

217

私という存在が夫の重荷であり、痛みである。私にとっても夫は同様だ。私たちは相手に与えている痛みと責任があるのだ。

後書きにかえて

.....

225

家族は鏡のようなもの。家族とのよき人間関係こそが幸福なのではないか。私は長い回り道をしてきたのかもしれない。

装丁 亀海昌次

男と女のこと

私が男と女のことばかりを小説に書くので、私の前途を心配してくれる心ある男性たち（私自身の父親と夫を筆頭に、二昔前に婚約をしたことのある男や、芸大時代の美術の男たち、編集者をのぞく《編集者の何人かはもしかしたら本当はそう考えていて、できるそばから原稿をさらっていく職業の都合上口には出さないだけかもしれないが》仕事仲間や飲み仲間など）が、そろそろもういいんじゃないか、と要するに、男と女を卒業しろよ、と、遠回しに、あるいは率直に、強迫的に、齒に衣を着せたり着せなかったり、実に色々な言い方で、私に忠告してくれるのである。

目下のところ（先のことはわからない）、私はそれを一笑に付すが（男と女の間にかかることにしか興味がないうし、そのこと以外に書きたくないし、第一書けない）、内心は穏やかでない。身内のものがとやかく言いたがるのはまあわかるけど、お酒の席で飲んべえどもに、私の一生の大事について、あれこれ肴にされるのはたまらない。男と女は止めちまえ、とロレッツの回らない舌で言われたって、止めてしまったらその日から原稿料が入らなくなるのだから、そこのところはどうしてくれるんだろう。

それじゃあなた、暴力マンガ描くの止めなさいよ、とか、エログロの記事なんかくだらない、止めちまえ、とか、媚びた宣伝文句など書くな、とか、女は親しい男の仕事の内容に口出しなどしない。暴力マンガだろうと、エログロだろうと、虫酸の走るようなコピーだろうと、女房子供を養っていなさるのだから、私個人の好き嫌いなどこの際問題にはならない。意見を聞かれれば答えるが、かといって、止めてしまえと指し図はしない。

でもなぜ、男たちは、私が男と女について書くことを、潔しいさぎよとしないのだろうか？ 彼らは、そんな私と知りあいであることを恥じ、腹を立て、男と女のことなど小説にあらず、一生の仕事にあらず、と言わんばかりだ。

それならば、この私は何を書いたら彼らの氣にいらるのだろうか？ 私を誇りに思い、尊重してくれるのだろうか？

これがもう、むちゃくちゃなのだ。

まず私の父。歴史小説を書けと宣のたまう。有吉佐和子や永井路子のように、まず歴史を読んで勉強し、後世に残るような名作を書いてくれ、とこれはもう悲願に近く、顔を見ると言う。時々ドサリと参考資料を送ってくる。あれを読め、これを勉強しろと、電話や手紙で矢の催促、アドヴァイス。遺言状にも、しかとしたためてあるのではないかと、非常に憂鬱。

夫は、アラン・コーレンのごとき小説でなければ、小説ではないと断じて譲らない。私はコーレンの本など読んだことはないので、真似ようがないが、彼に言わせると最高のユーモア、最高の皮肉が全編にちりばめられているそうである。

誰が言ったのか誰から聞いてきたのかは知らないが、私の小説を、ジュンイチロー・タニザキ風と（ふつう外国人が知っている（つまり読むことができる）日本の作家は、ミシマ、タニザキ、カワバタくらいだから、その中の誰に近いと言え、まあタニザキだろうと、短絡に誰かが教えたのをこれまた短絡に信じこんで）、私の英国人の夫は悩み、恥じいらるばかりなのだ。（なぜ恥じるのか

は、皆目わからないが）

ある男性は、SFを書いたらどうか、と真顔で言ってくれる。まあ譲歩してSFファンタジー物、ぎりぎりSFラヴまでは許せると。

これからは、君、SFの時代だよ、と舌も嚙まずに十人ばかりのカタカナの名前を並べたてたが、私はその誰も知らなかった。

別の男性は、ディック・フランシスのような競馬のサスペンスがいいと言うし、いまや文学は南アメリカですよ、ジョサを読みましたか、マルケスはどうです、南アメリカの線でやって下さいと熱心にすすめる男もいる。

かと思うと、ヒューマニティーに富んだ、人の心を揺り動かすような長編の大作を期待される。私は私。森瑤子。男と女について書く小説家。有吉佐和子のように書きたくもないし、アラン・コーレンも無理である。ましてやディック・フランシス風もSFも、ジョサ、及びマルケスも、ヒューマンタッチの大長編も、喜んで読ませて頂くが、自分の作風とはならない。

結局なんのことはない、私を取り巻く男たちは（父親も含めて）、自分の読みたい物、好きなジャンルを私に押しつけているのである。彼らの個人的な趣味を満足させるために私は書いているわけではないので（それに彼ら個人の専用作家になるつもりもないので）、ここ当分、私は自分の路線を行くとして、皇女和の宮は有吉佐和子に、競馬物はフランシスに、ユーモアはコーレン氏に喜んでおまかせする。

世の中には、男と女しかないのだから、しかし星の数ほど男と女がおり、夥しい数の組み合わせがあるのだから、こんなに豊富な素材はないし、これほどやりがいのある対象も他にない。

男と女は、同じ元素からできている同じ人類でありながら、染色体の数がたったひとつ違うために、同じ言語を喋りながら言葉が全然通じなかったり、最も親しいかたちで肉体を重ねあっても、完全に和合することなど不可能なように思われる。

「男」から私が連想するのは、不毛、自由、戦場、奈落などである。

男と女の間には、暗くて深い河がある、というのは全くの実感で、私たちはその両彼岸から相手に呼びかけているようなものだ。意味がわからないどころか、相手の声すら聞こえないことがある。

善意で始めた会話が、いつのまにか平行線となり、ついには憎むべき敵と喋っているような具合になることがよくある。

「結婚記念日くらい、子供たちのことは忘れて、二人で外で食事しようか」と、結婚記念日を忘れないでいてくれただけでもありがたいのに、輪をかけて優しい夫の言葉。これは善意だ。

善意には善意をもって、

「まあ、うれしい！」と喜びを笑顔で伝える。

「どこへ行こうか。君、どこへ行きたい？」

マキシム。思いきりおしやれをして行ってみよう。今更マキシムでもないみたいだけど、女さか

りのうちに、本物の中にこの身を一度置いてみたい。と、これは切実きわまりない本音だが、なんとなくコソバユイだろうし、第一お金がかかり過ぎる。夫の善意を濫用してはいけない。

「どこでもいいわ」

あなたが選んで連れて行ってくれる所なら、どこでも喜んで一緒にするわ、という意味の、ニュアンスの柔らかいどこでもいいわなのだが（夫婦だから、それくらい察しがついてあたり前とは思ふ）、夫には、その正確に意図するところがなぜか組み取れない。ニュアンスの柔らかさも気がつかない。それどころか、ここが問題なのだが、どこでも適当なところでもいいわよ、と、妻の返事をそう聞いてしまうのである。

妻は、喜んでどこでも一緒にするわと意図したつもりなのに、夫の耳には、適当なところでもいいわよ、と投げやりに、ふてぶてしく響いてしまうという、この絶望的な断絶。ここに私は奈落を見ろのような気がする。

「どこでもいいって、君には自分の意見でもないのか」と夫は急に不機嫌になって言う。「かつて一度でも、君って女は、自分の意志を述べたことがあったかね」論理の飛躍。男の、一度でもが出るともういけない。全存在を否定されたような気にさせられるからだ。

君は一度でも僕に優しい言葉をかけてくれたことがあったかい。

君の方から一度でもセックスを誘いかけたことがあったかね。

一度でも考えてくれたことがあるのか、一度でもしてくれたことがあるのか。

一度もない、というのは正しくない。それは夫も知っているのだ。ただし、確かにそれほど多くはない。それも事実だ。日本人の女には（男もそうだが）、一日に三回も四回も連れあいにアイ・ラブユーを囁く習慣ささやくもなければ、その土壤もない。優しい言葉をかけあうのに、自分をふるいたたせるようにでもないかぎりは、照れくさくてやりきれない。

セックスを女の方から誘いかけるなんていうことも、私の場合は数えるほどもない。その気になつていない夫に誘いかけて、やつて頂くというのは、好きじゃない。確かに数は多くはないが、しかし一度もない、というわけでは決してない。少ないからこそ、必死の覚悟で、自分をふるいたたせて、誇りを捨てて、働きかけた記憶は生々しい。

さて話を結婚記念日の朝の会話に戻してみよう。

そうまで言われて今更、マキシムへ行きたかったのよ、とは死んでも言えない。

「そんなふうに言うんなら、やめましよう、やめましよう、やめましよう！」

心のどこかで、まあそうごねるなよ、と夫がとりなしてくるのを期待して、妻は朝食のテーブルを手荒に片づけ始める。だが夫は儼然おごげんと黙したまま。望みだにしまった惨めな結末。ああ馬鹿だな、夫婦喧嘩で家を飛びだしても、夫が後を追って来たのは新婚早々の三回だけだったじゃないか。忘れもしない四度目の夜。真冬なのにオーバーも着ないで、しかも素足で飛びだしてしまった。角まで走って振り向いたが、夫が来ない。あの驚き。走る足が歩みにかわり、振り向き振り向きのトボトボ歩き。暗闇の中で寒さと怒りと失望とに震えながら、凝然と待ち続けた記憶。敗北に

打ちのめされて一人戻る帰途の道のりの惨めさ、寒さ。

当然結婚記念日のディナーはご破算。夫は深夜の泥酔のご帰館となる。男と女の間には、深くて暗い河がある——十年以上も一緒に暮らした仲なのに、である。

言葉のコミュニケーションでさえかくのごときなのであるから、肉体の会話——性愛に於いては、もはや惨憺たるものだと言っている。

言葉が通じあわなければ、私たちは腹を立てて相手なり子供なりに当り散らすか、冷蔵庫の中身を空にして食欲にすりかえるか、バーゲンセールで安物を買いかんで鬱憤を晴らすか、女友だちと長電話で喋りまくって発散するか、なんとかしてその場の怒りをしずめることができる。

しかし性愛の調和を欠く場合は、バーゲンセールや電話の長話などでは解決しないのである。怒りは（パートナーに対する怒りであれ、自分自身に対する怒りであれ、あるいはその両方であれ）深く潜行し、根を張り、一触即発の様相をかもします。

私たちは性の暗闇の中で、長いこと言葉を失ってきた。文字どおり手探りで事を行ってきた。あししてこうして、もっと早く、もっと右、あるいは左、ここをこうして、違う、違う、そうじゃないの、こうなのよ、とことこまかに注文指導しながらセックスが行えるものなら（そういう人もいると思うし、それはそれで大変結構でうらやましいかぎりだが）、男の見当違いな愛撫に感じもしない快感の声を上げたり、ありもしないオーガズムを演技しなくとも済んだかもしれない。

私たちは、自分が不感症かもしれないと相手に思われることを恐れて演技するが、一方では相手